

がんばる工織大生 | Active KIT students

2021年度松ヶ崎祭開催の舞台裏

コロナ禍の影響を受けて2年ぶりの開催となった松ヶ崎祭。徹底的な感染防止対策を講じた上での対面開催となり、無事に成功を収めました。

その裏にどのような努力があったのか、松ヶ崎祭実行委員長の江口優人さん（応用化学課程2回生）、副委員長の辻伶大さん（応用化学課程2回生）に語ってもらいました。

Fig.2——目玉企画の一つ、手作りテント



Fig.1——辻さん（左）と江口さん（右）



——実行委員の活動内容について教えてください。

辻 模擬店や展示、ステージ企画など、松ヶ崎祭でどのような催しを実施するかを検討や、参加する各団体の企画内容の把握、取りまとめなどが主な活動内容です。

江口 催しの内容が決定した後は各団体のサポートに回ります。レンタル品の手配や、出展するエリアの振り分けなど裏方に徹します。今回は感染症対策に気を配らなければならず、その点も大変でした。主催者側の学生は開催2週間前から毎日体温を記録し、ステージで対面ライブを行う学生にはPCR検査を必須としました。来場者にも事前の情報登録を求め、来場者の中で感染が発覚した場合にはすぐに連絡を取れる態勢を整えました。

辻 幸い感染者が出ることもなく、無事にイベントを終えられました。オンライン開催でしたらこういった手間が省けましたが、今回は絶対に対面で開催しようと決めていました。

江口 対面開催にすることで、コロナ禍によって希薄になってしまった人間関係を取り戻し、大学祭運営のノウハウや伝統が途切れないようにすることを目的としていました。こうした考えから、松ヶ崎祭のテーマも「維ぐ（つなぐ）」としました。

——松ヶ崎祭を振り返っての思い出を教えてください。

江口 松ヶ崎祭の特徴的な企画の一つに、建築系サークルによる手作りテントがあります。学生が1：1スケールの設計と施工を行える貴重な企画で、毎年大人数で何時間もかけて作り上げているのですが、今年はたったの6時間しか準備時間が設けられていなかったことや、感染対策についての懸念などから、一時開催が危ぶまれる事態となりました。しかし、各団体や先生方の協力による設計の見直しなどにより、なんとか当日には手作りテントを並べることができました。「工織大らしさ」を象徴するこの企画が実現できて本当に良かったと思います。

辻 副委員長という立場の難しさを知りました。他のメンバーは渉外、会計、広報といったように担当が決まっていますが、副委員長は全体を見なければいけません。だからこそ、自分は何をすればいいのか迷った時期もありました。でも最後は「松ヶ崎祭を盛り上げたい」という気持ちにただ従って、できることは何でもやるようにし、また当日は各企画で緊急事態が起きた際などにすぐ動けるよう、こまめな連絡を受けて全体を俯瞰するようにしました。

江口 私たちは大学祭を経験するのが今回初めてで、うまくできなかった点も多くあります。自分自身も、委員長として仕事を割り振るのが下手だったと反省しています。今回たくさんの方のノウハウを得ることができたので、それを次年度に活かしていきたいです。

——次の松ヶ崎祭に向けての意気込みをお願いします。

辻 次はぜひ模擬店をやりたいですね。今回は感染症対策の関係もあって実現が難しかったのですが、やっぱり模擬店があるとお祭りらしさが出て楽しいと思います。また今回は模擬店ができない分、ストラックアウトなど工夫を凝らした面白い企画が多くあったので、その良さも残していけるようにしたいです。

江口 芸人やアーティストの方も呼びたいと考えていて、すでに予算の相談を進めています。これまでコロナ禍で我慢を強いられてきた部分があると思うので、そんな学生の気持ちを晴らせる大学祭にしたいです。昔は前夜祭や後夜祭も行ってたそうで、そうした伝統を復活させるのも面白いなとイメージを膨らませています。

辻 今回実行委員をやってみてとても大変でしたが、それ以上に楽しかったです。次年度も委員会メンバーが楽しめるような松ヶ崎祭にしたいと思います。

江口 面白い企画案があればぜひ実行委員に教えてください。松ヶ崎祭をもっと盛り上げるために、新しいメンバーも大歓迎です。

コロナ禍で隔てられた人と人をつなぎ、そして松ヶ崎祭の伝統を未来へとつないでいく。